

2021年5月

課題本 『鬼の橋』

伊藤 遊/著 福音館書店 1998年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

〈「非天丸は泣いていたの。よだれを流しながら、涙も流していたわ。あたしを食べたい気もちと必死で闘っているのがわかった。あたし、かわいそうで、かわいそうで..」〉

1998年が出版年なので、もう20年以上前の記憶になるが、『鬼の橋』と聞くと、この阿子那のことばが鮮明に甦る。鬼の非天丸が、人間の女の子阿子那の傍に居たいと切実に願う故に、鬼の自性である人食いの内なる欲望に打ち勝とうと苦しむ姿である。

作品に登場する人物が、小野篁、彼の父岑守、それに坂上田村麻呂という実在の人物であるし、特に、小野篁は、東広島市河内町入野生まれだという伝説もあって、随分身近に感じる。ご近所さんなのだ。「篁」と名前の付いたグループや機関紙もある。それに加えて、京都の東山には、一条天皇の中宮定子の陵墓もあってこの近辺が懐かしい。

小野篁が、昼間は都の宮廷で働き、夜は冥府の役人だった話も、『江談抄』や『今昔物語』などの記述から有名な話である。京都の地下には魑魅魍魎の徘徊する冥府があって、東山珍皇寺の井戸から出入りできると教えられた時は、ワクワクして楽しかった。現代では、魑魅魍魎がウロウロしているのは地上か地下か。

今回は何度目かの読みなので、筋の展開の代わりに、小さな渦巻きを探してみた。

渦の中心に据えたのは「橋」であった。小説の中に文字として描写されるのは、「鴨川にかかる五条橋」と、「冥界の河にかかる橋」だけである。しかし、「橋」というイメージは、それだけではない。

「橋」を意識するのは、2つのものが向かい合い、結ぶ必要が生じたときだ。大昔、深い谷に大樹がまたがって倒れ、その上を通れば知らない向う側に行けることを知ったご先祖様方は、さぞうれしかっただろう。川や海を挟んだ二つの地点を結んだり、鉄路や道路を跨いで越したり、いずれにしても、それらの間には越さねばならない隔りがある。

それは地勢的であるとは限らない。人と人の中にもある。人間はそれぞれが唯一の存在で、いかに愛しても相手にはなれないからだ。一人の人の中に二点を抱えている事も多い。

鬼と人間の間＝人間は、手に負えない災難や、己の敵、憎しみ、足下の身に巣くう邪悪な心など不都合な事物を、自分の守備範囲から追い出して、身の外に置き「鬼」と名付けて形を造った。だから、その「鬼」との間に、人間の方から友好の橋を架けることはない。だが、「鬼」の方は、時々忘れずに橋を造ってやってきて、人間に「鬼」を思い出させる。人間も、怒りや不安で我を忘れて、「鬼」の造った橋を渡り、自分たちで造ったはずの「鬼」そっくりになる時が度々ある。ヒューマニズムは、仁王様足下の天の邪鬼よろしく、「鬼」が支えているのか

もしれない。

篁と鬼の間＝少年篁のであう鬼は、非天丸以外、どの鬼も自分を危うくするものである。その存在は許せない。しかし、あるとき、篁の母は、比右子も鬼だったという。過失で比右子を死なせたと悔いを持つ篁は、人に鬼を見る母を知る。鬼と無関係の人間などいないのだ。鬼との間にかかる橋は、罪の意識に沈み込んだ篁に、そのまま抱えて歩いて行けば良いのだと励ますようだ。

少年の篁と元服した篁の間＝子ども時代から、大人になるのは、決心のいる事だ。そのため、多くの民族や時代に、けじめを付ける儀式が用意される。篁にとっての加冠は、異腹の妹比右子への罪の意識と複雑な慕情とを、胸の中で整理することであった。自分の感情ではなく、周りの人々の思いも引き受けなければならなくなるのが大人になるということ。成長と呼ばれる橋は、橋脚に、少年時代の後悔を隠し持っている。

篁と父の間＝宮中のしがらみを長年泳いできた父に対して、まだ力の無い少年篁。父と子の間には、大きな壁がある。それを越える橋を協同で造るには、痛みを伴う和解が必要だ。陸奥へ赴任する父に同道する篁は、異腹の妹をもたらした父に、わだかまりを持っている。その父に比右子を慈しんでくれたと感謝され、父の相棒となることを受け入れる。父と子は、陸奥で共に新しい人々と新しい橋を造ろうとするのだ。お互いの弱さを知りながら、新しいものを二人で見る事によって、父と子の間にも橋が架かる。

篁と比右子の間＝小野家の嫡男である篁。突然現れた 2 才年下の異腹の妹比右子。二人の間にかかけられようとした橋は、比右子の事故死によって未完となった。禁止された地に連れだし、見失って死なせてしまった篁には、二人の間で架橋途中であった様々な思い出が、苦しく大きな痕跡として残った。

篁と阿子那の間＝妹比右子の事故死の責任を心に刻む篁に、なんの屈託もなく振る舞う女の子阿子那。篁が、人を食う鬼非天丸から少女を護ろうとするも、篁の心の容量では及ばない。二人の間の橋は、阿子那によって護られているようだ。

篁と非天丸の間＝冥土からやっと逃げ出した篁が、冥土から来た非天丸を快く思うはずもない。2 人の間には、結ばれる橋はあり得なかったのに、阿子那が縁となってお互いがきがかかりな存在となった。片ツノをもがれた非天丸と、自分も片ツノをもがれた鬼であったと自覚した篁の間に、いたわりの共感が生まれる。憎む心を土台石に沈めて、二人の間にかかけられた橋は、非天丸の賞賛に応じて強くなりたい篁を育て、非天丸からは、人食いの鬼の習性を取り除いた。願いや希望を育てながら橋がだんだん頑丈になっていく。

阿子那と非天丸の間＝食われる人間と食う鬼の間に橋が架かるのか。本来、その間柄は断絶しておくことで人間の平安が保たれる。だが、鬼の非天丸が人間の阿子那を大切な存在と感じたときから非天丸の煩悶が生まれた。鬼はツノを持っていてはこの世に居られない。だが、阿子那は、ツノがあるままで良いと言う。「助けてください、仏さま。」橋が架かる。

この世とあの世の間＝篁は、この世とあの世を行き来したと伝えられる。あの世は 2 つあるようだ。1 つは、地獄、もう 1 つは浄土。篁には、地獄への橋は想像できているが、浄土は想像できないらしい。非天丸が言う。「橋は...あると思えばある。無いと思えば無い」。阿子那も非天丸も浄土があると思っている。だが、浄土には橋は要らない。他の命をとることで生きる鬼の非天丸の涎を流し涙を流す姿が、そのまま浄土に直結する。

1000 年の時を繋ぐ見えない「橋」が、鬼と人間を一塊に溶かして、又、明日に繋ぐ。

～読書会の余韻の中で～ 「三行感想」

◆【 YA 】

著者伊藤 遊の作品を初めて読む。小説の面白味が凝縮されたような作品でとても楽しく読んだ。実在の人物等が登場し、又おとぎ話の鬼たちも登場。話の始め頃からはディズニーの「美女と野獣」を思い出し、半ば頃終りにかけては、葉室麟や藤沢周平の小説を彷彿とさせるようなホロりとくる場面が多々あり、改めて小野篁という平安期を生きた奇行で知られた人に少し興味が沸いた。家族で出向いた陸奥、戦で土地も人の心も荒れてしまった陸奥に学問所も必要と説く父岑守の言葉に一体どのようにこたえ、成長していったのだろう。

◆【 KT 】

平安初期に実在した小野篁の少年時代の成長を書いたファンタジー。百人一首の参議篁と小野篁が結びついていなかった。ルビが多く、読みやすく面白かった。阿子那と非天丸の關係にホロリ。鬼とは？橋とは？よくわからない。皆のいろいろな考えが聞けたのもよかったが、入野の竹林寺の『おののたかむらものがたり』の紙芝居が一番良かった。

◆【 T 】

親に黙って妹の比右子を荒れ寺に連れ出し隠れ鬼をして遊び、妹が井戸に落ちたことに気づかずそのまま帰ってきたしまった篁。比右子が死んで悔恨に苛まれ、このさき生きる自分を思い描くことができず抜け殻のようになってしまったが、橋の下で暮らす阿子那や阿子那を助ける非天丸、冥界の征夷大將軍坂上田村麻呂達に出会い話をしたり、共に過ごしたりするうちに徐々に成長し、もっと強くなりたいと願うようになり生きる力を取り戻していく。父親の小野岑守が陸奥守になり東北へ旅立たなければいけないとき、父親の不安やさみしさに気づき寄り添うと共に、家族のためにどうすべきか考えられるまでに成長した。篁の葛藤や成長・阿子那と非天丸の悲しみと二人の絆……いい本に出会えたなと思った。

◆【 K子 】

とても面白い小説です。ファンタジーものです。挿絵もあり、何故か郷愁を感じました。読み易くもありました。

主人公の小野篁は実在の人物です。小野と聞けば…「妹子」「小町」も縁につながる人達です。「竹林寺」とも深い繋がりがあるそうです。ストーリーは簡単ですが……なかなか奥深いものがあります。掘り下げると突き当たる事の多々。鬼の存在については自分の内に住んでいるもの。他人によってもたらされる鬼(これの退治の方が大変なことが多いと思います。)

橋の存在・渡れるもの・渡れないもの・渡ってはいけないもの・流されるもの・それぞれが背負っているもの

一回目さらっと！二回目待てよ！三回目自問自答！読後感 手強さ満杯!!!

『鬼の橋』を読んで

◆【 TK 】

先月に続いて福音館の児童文学だった。男の子が、喜び共感しそうな物語である。人物の出てくる当時は疫病争い災害が多く、死体が川に捨てられて沢山浮いていたので、まるで地獄のようだっただろう。それが背景になっている。でも今と変わらないとも言える。

橋と川はあの世とのつなぎ目

人間と鬼との堺

人間は、死、善悪、永遠という課題に常に向き合って闘っている。特に、善悪は神様にしか決められないもので、人間は何年一生生きても磁石を持たずどこかをめざしてさまよい続けてしまっているような気がしてしまう。人の不完全さは目につくが自分の罪はわからないところもある。堂々巡りで短い人生を歩んでいる。どうしても人は死んでいき、どうしても罪を犯してしまう。そんな人間を神は憐れんでいると思う。

鬼が一生懸命人間になろうとしている、そしてそれを応援している女の子が優しい。鬼も、角を触られたら痛くて力が弱くなっていく自分にも気づいている。

人間の弱さを気づいて人を責めるのではなく人を励ましてあげる事を感じた。

◆【 N2 】

小野篁については百人一首の和歌と、夜毎地獄へ行き閻魔様の手伝いをしていたという伝説を知るだけで、彼の子供時代については何の知識もありませんでした。その篁の子供時代を舞台にしたファンタジーでとても面白く読みました。

子供心のちょっとした意地悪と不注意で異母妹の比右子を亡くし、導かれるように比右子の落ちた井戸に吸い込まれ、人食い鬼達に追いかけられるなか比右子が渡った冥界への橋を渡りかけたところで坂上田村麻呂に会い、この世に送り返されてしまいます。

大水の出た日に五条橋の東からやって来た非天丸は、流れ来る大木から父の作った橋を守ってほしいと嘆願する阿子那の身の上話を聞き、はじめて流す自分の涙に驚くのです。

橋が無くなる事をひどく恐れる非天丸、笑った自分に驚く非天丸。鬼の身にはそれらの感情は無かったのでしょうか。だから鬼なのでしょうか。

五条橋を渡り終えたあと、阿子那と非天丸はそれぞれの弱いところ足りないところを補い合いながら暮らすうちに、非天丸は徐々に人間の感情を取り戻していきます。篁は阿子那が非天丸に食われないように守ろうと必死なのですが、比右子は非天丸の優しさを見抜き、彼を信じて彼が鬼の習性を表すことには目を瞑っています。

非天丸も昔は人だったはずですが、いつどうして鬼となるべくその橋を渡ってしまったのでしょうか。悲しみ、怒り、恨み、妬み、深すぎる愛情によって人はたやすく鬼に変じるのでしょうか。

坂上田村麻呂が戦功にも関わらず死して尚都を守る任務から放たれずあの世へ旅立てなかったのは、蝦夷を制圧する時に鬼のようだったからなのでしょうか。

肉食の非天丸は、阿子那の寝姿によだれを垂らしながら涙を流しながら見守っています。本能と理性と愛情の間で葛藤し、苦悩する非天丸。そしてその非天丸の姿に気づかないふり

をする阿子那。この非天丸と阿子那の姿には胸が熱くなりました。

橋を渡って鬼の世に行くか、橋を渡って人の世に行くかは自分の心が決めるのです。

◆【 F 】

スラスラと一気に読みできた。話の筋も分かりやすく、分厚い本に初めて挑戦する子供が読むのにちょうど良さそうだ。一冊読めた自信から他の本も読んでみたいと気持ちになるのではないだろうか、読書好きへの第一歩だ。

1997年、児童文学ファンタジー大賞に輝いた「鬼の橋」は受賞の翌年に発行され、受賞の翌々年には読書感想文(※)の課題本に選ばれている。同じ年、竹原読書会でも課題本として取り上げられていたようだが1999年当時は、まだ読書会で感想文集が作られていなかったのだからどんな感想が飛び出したのかは分からない。非常に残念だ！

※青少年読書感想文全国コンクールの第45回中学校の部のこと。

読書会で何度も取り上げられる『鬼の本』は、自分にとっての鬼とは？橋とは？を考えることによって、今の自分なりの読み方を楽しむことができる本らしい。だがそんなこと思いもせずに話の筋を読んで、子ども向けだからなのか物足りないなと思って一回だけ読んで本を閉じてしまった(子供でも読めるという意味であって、本に子供向けという区分があるわけではないらしい)。

読んだ印象として「漫画のようなもの」という感想を持った、阿子那が見事にオテンバな台詞回しをしており親しみやすいキャラクターという印象を得たことが主要因だと思う。そして漫画と比べて話の展開が味気なく感じた。

おそらく子供読者は、冥界に行くことができる特別な存在である一方、自分は恵まれた貴族の家に住んでいて橋の下で暮らす知り合いに対して距離を感じてしまう筈に対して自分を重ねて考えたり、身寄りがなくとも逞しく一人で生きている阿子那に憧れを投影したりして作品世界を楽しむのだと思う。

しかし大人になって、自分が自分でしかないことに気づいてしまった自分がかつてのように自分を投影して物語世界を自由に楽しむことはできず、逆に橋の下で暮らす十歳そこいらの孤児の描かれていない不幸と現実の暮らしについて余計な心配をしたりした(これは作者の意図から外れる読み方だろうが読者は意図的に描かれていない部分を見つめる姿勢も大事だと思う)。

◆【 MM 】

妹を想う兄の気持ち、子供を想う親の気持ち、自分に近い人を大切に思う気持ち、それぞれを考えて今の自分を少し離れて俯瞰して見ている気分を味わった。

自分の悪戯心から大切な妹を亡くしてしまった筈。その悲しみと後悔から後を追おうと橋を渡ろうとする筈に放った將軍の言葉に泣いた。「忘れなくていい。忘れずに、かかえて生きてゆけ」。忘れなくていいこと…これは悲しみにも怒りにも当てはまる気がする。そう感じてい

ることを自分で認める、そしてそれを受け止める。それを否定するとストレスもたまるし周りが見えなくなってしまう。私になりたい大人たちはこれが自然とできている人だ。自分を許せるひとは人も許せる。自分を受け入れる人は人も受け入れられる。認められる。

作者の伊藤遊は絵本で最初に知った。今回の『鬼の橋』を読むと、丁寧な状況の描写と心の動きの表現がとてもうまいと思った。だから読んでいてもしらけることなく本の世界へ入っていける。鬼と人間がすんなり生活に溶け込んでいる。私が出会った伊藤遊の絵本は鬼ではなく狐が描かれているのだが、見えない物が見えることがある、ああ本当にそんなことがあるかもしれないなあ、あるといいなあと思えて心があたたかくなったのを思い出した。ないものがあるということ、そういう想像力を働かせることができるといういろいろなことも受け止められる気がする。

私はファンタジーが苦手だと話したことがあると思う。でもそれは大人になってからのことで思い返してみれば子供の頃はファンタジーとかなど考えもせずに読書を楽しんでいた。どこで苦手になっちゃったのかしら……。でも好きな作家はずっといてその人たちが書く物語を楽しんでいたのだからファンタジーが苦手といつのまにか自分で決めつけていたのかもしれない。自分ひとりだけの読書活動なら好きなものだけを読んでいけばいいので幅が広がることは滅多にない。しかし読書会に参加することで、いつもなら手に出さない世界の本を読まなければいけない、それが新しい考え方を自分にもたらす。人の感想を聞くことで新しい考え方に触れることができる。その新しい刺激が自分を広げていってくれているのだなあと今回の読書会に参加して感じた。だって『鬼の橋』から鬼について考えますか？そして鬼って自分の中にいると考えられますか？！でも不思議とそれがすんなり「そうそう、鬼って自分の中にいるのよ」と言ってしまう参加者が愛おしいです。その感覚を自然に身につけている皆さんと交流できることがありがたいことだと思います。

◆【 MS 】

1 愉しくて しらべてみました

(1) 著者「伊藤 遊」は？

著者「伊藤 遊」と出会ったのは、およそ10年前だったでしょうか。絵本『きつね、きつね、きつねがおる』を読んだ時です。子供にだけ見える狐火の話。見えない世界を筆の力で見えるようにした作品で、彼女の世界観に魅了されました。

京都と言えば「魍魎魍魎」をイメージします。京都の魅力の一つだとも思っています。もしも京都に生まれ、寝物語にお婆さんから京都の昔話を聞きながら育ったら、どんな興味深い話を想像し、話を創られることでしょうか。それが、「伊藤 遊」だったので。

彼女は結婚し、子供が幼稚園に入って時間に余裕ができた時、お金のかからない愉しみを探して、文章を書くことを始められたそうです。すると一気に300枚。それが『なるかみ』。第2回児童文学ファンタジー大賞に応募すると、最後まで残り佳作賞。すると選考審査長だった河合隼雄さんから直接はげましの電話をいただいたとか。次の年プレッシャーの中、書いたのが『鬼の橋』。すると見事大賞を受賞。福音館取締役の斎藤敦夫さんから直接出版の依頼を受けたそうです。

多筆な作家ではないようですが、出版すると様々な賞を受賞。『えんの松原』は、宮中に

仕える少年と東宮が、東宮に祟る怨霊を探します。『ユウキ』は、転校生の名前がみなユウキです。『つくも神』は、蔵の中で古い道具に魂が乗り付きます。『狛犬の佐助』は、親方に造られた狛犬と最後の弟子に造られた狛犬が話を始めます。

伊藤 遊の作品は、登場人物のとらえ方が温かく深いので読み終わるとほっこりします。

(2) 作品の時代背景は？

時代は平安時代初期。桓武天皇が長岡京遷都からたった10年で平安京遷都を行い、京都是新しい都としてできたばかりでした。遷都の理由に驚きます。桓武天皇の腹心藤原種継が暗殺されるという事件が起きました。すると、実弟早良(さわら)親王の仕業ではないかと噂が立ち、桓武天皇はここぞとばかり早良親王に嫌疑をかけ、皇太子の地位を剥奪し幽閉した。親王は無実を訴えて十日余り絶食し、壮絶な最期を遂げたのです。すると3年の間に桓武天皇は実母親と四人の妻を亡くしました。桓武天皇は怨霊の凄まじさに戦慄を覚え、遷都を決行したそうです。

桓武天皇は、血のつながった弟を蹴落としてでも、我が息子(安殿)に天皇を譲ったのですが、譲られた平城天皇は3年間病床に着き、3年で次息子(賀美能)嵯峨天皇に攘夷したのです。このように、政(まつりごと)をする人達は権力闘争に明け暮れ、怨霊に苛まされました。

民衆は干ばつによる慢性的な飢えや、天然痘による疫病、大地震などの天災、坂上田村麻呂等による蝦夷(えみし)東北遠征による財政難などによって、その日の命も危うい悲惨さだったようです。

地域としては、五条橋の向こうは 葬送の地として知られる鳥辺野(とりべの)。六道珍皇寺の井戸は冥土への入口と言われ、嵯峨の福正寺が出口と言われたそうです。小野篁は遠流先の隠岐島から京都に帰ってから、夜ごと都を散策するので、上記の入口出口を使ったと噂され、昼間は朝廷で官吏を、夜間は冥府において閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていたという伝説がある。

(3) 主人公小野篁は？

主人公小野篁は、平安初期に実在した人物です。漢詩文にすぐれ、有能な官僚として四代の帝に仕えました。彼の豊かな才能は、唐の詩人、白樂天になぞらえられ、さまざまな史料の中で讃えられています。

篁には「野狂」という呼び名がありましたが、それは、常識にとらわれず、簡単には妥協しない人柄であったことを示しているようです。遣唐副使に選ばれ、3度目の出航の際、壊れた船に乗せようとした上役に抗議して、乗船を拒否するという事件を起こしました。怒った嵯峨上皇は、篁を隠岐島へ流してしまいました。このときに彼が詠んだのが、百人一首にもある

わたの原^{はら} 八十島^{やそしま}かけて 漕^こぎ出^いでぬと 人^{ひと}には告^つげよ 海^{あま}人の釣舟 (参議篁)

という歌です。>

【あとがきより 一部引用】

また、逸話や伝説の多い人で、河内町入野にある「竹林寺」にも篁の伝説がありました。講師の吉川先生が、河内町入野の会で作成された紙芝居『おののたかむらものがたり』を朗読してくださいました。

2 感じたことは…

『鬼の橋』を読み、読書会を終えて感じたことは、「鬼」と「人」にはどんな違いがあり、「鬼の

橋」はあるのかという問いでした。

「鬼」の非天丸は、くおれだって、たぶん昔は人だったはずだ。人が鬼になるのなら、鬼だって人になれる」と言います。非天丸はきっと身の上に不幸が襲いかかり、苦しみや哀しみに悩み、悔しくてたまらず憎しみを爆発させたのでしょう(作中には具体的には描かれていません)。自分で荒れる気持ちをどうにも制御できなくなり、「鬼への橋」を渡り、鬼になったのかもしれない。それで冥界への橋の袂で暴れるようになったのです。ところが、死後も都の守護神として葬られた田村麻呂に片方のツノをとられたことで、力や力の源でもあった憎む心も一緒になくなり、手に入れたものは知恵と情けであるらしかったのです。非天丸は、命懸けで大洪水から阿子那の亡き父が造ったという五条の橋を守ろうとし、非天丸に食われる恐怖の中でさえ自分を信じる阿子那を前に、本能と愛情の狭間で葛藤し苦悩します。まるで修行のような日々を過ごしますが、信じることの尊さを学び、鬼から再び人になろうとしています。その意味では非天丸にとって「鬼の橋」は、「鬼への橋」であり、再び人になるために渡った「鬼からの橋」なのです。

一方、「人」である坂上田村麻呂も、戦(生死)の場面では己が生きんために多くの敵を殺し、見方からすると英雄だが、相手側から見ると我が命・家族の命・仲間の命を奪う「鬼」そのものなのです。相手側にどれだけ多くの憎しみ苦しみ哀しみ悔しさを与えたことでしょう。

そう考えると、「鬼」と「人」にどんな違いがあるのでしょうか。というか、違いってあるのでしょうか。「人」も「鬼」も、一人の中に「一緒くた」に居て分けられないのではないのでしょうか。

さらに、非天丸は「冥界の橋は幻の橋だ。あると思えばあるが、ないと思えばない」と言います。「鬼の橋」は、人が四苦八苦の縁にふれて鬼になってしまい、瞬時に渡る橋であるとともに、一旦「鬼」になったならば、知恵と情けで精進すれば渡れる橋と言えるのではないかと思ひ至りました。言い換えれば、『鬼の橋』は、私たち、人の心の内に在り、あると思えばあるが、ないと思えばない」と言えるのではないのでしょうか。

ちなみに私の心の内に在る鬼は、神出鬼没盛りです。